川柳

青木　十九郎
重森　恒雄　選
峯　裕見子

特選

妻にある朝採り胡瓜ほどの棘

長浜市　野口成人

（評）まだ朝露に濡れているような胡瓜。手にチクッと棘が刺さることがある。そのような性格の妻であるよと作者は言う。「ほどの」が夫婦の機微を見せて巧みである。妻のその性格も読者には愉快だ。（裕見子）

特選

合羽買う雨が虚ろにならぬよう

東近江市　知野見松子

（評）雨が降ったら雨に打たれればいいのだ。合羽を買ってその日を待っている。肩を背を叩く雨に打たれて深く感じることがあるのだろう。
眺めていれば優しい雨かもしれないが・・。（恒雄）

特選

母さんは北風だってお茶を出す

八坂町　小野椿

（評）柔和なお顔の、人のいい、細やかな気配りの行き届いたお母さん。このようなお母さんに育まれた人は幸せに恵まれています。きっとあなたも、お母さんに似ているのでしょう。（十九郎）

入選

ばあちゃんのどこを押しても笑い声

八坂町　山本はるか

（評）孫にとって「明るいばあちゃん」は救いである。親は「ちゃんと育てねば」との思いから厳しく接してしまうことが多い。無条件で受け入れて愛してくれるばあちゃん。いつも笑っているばあちゃん。（裕見子）

入選

ブギウギのリズムに乗って紅をさす

須越町　島田洋子

（評）ＮＨＫの朝の連続テレビ小説「ブギウギ」を観ながら朝出かける前の化粧をしている。その８拍子のリズムは軽快で、明るく元気な顔が仕上がってゆく。（恒雄）

入選

一冊の絵本に母の声がある

正法寺町　髙井豊

（評）お母さんがいつも聴かせてくださった童話の絵本。お母さんの優しい声に乗って私は夢の国に誘われて、夢中になって聴いていました。今でもその絵本を広げると、お母さんの懐かしい声が聞こえてきます。（十九郎）

入選

安売りと書かれて青い林檎達

稲里町　覇流不良者

（評）生産者が苦労して作った林檎である。
「安売り」の札はリンゴにとっても、いかにも不本意であろう。作者の真意とは違うかもしれないが、私には若い人の就職や求人の内容。また、これから生きて行くことの厳しさなども考えさせられてしまうのである。（裕見子）

入選　キャベツ半分逞しくもりあがる

新海浜二丁目　森口ゆめみ

（評）さぞかし大きくみずみずしく育ったキャベツなのだろう。半分だけのキャベツがでんと座り盛り上がり方が逞しい。出来も良くて美味しいに違いない。（恒雄）

入選　寂しさを包んでくれた春日和

日夏町　浅井利行

（評）何かの事情で心に隙間風が吹き抜けて、物寂しい日々が続いています。しかし、自然はありがたい。暖かいのどかな春が訪れ、あなたを包み込んでくれました。（十九郎）

佳作　大試験控える孫のストレッチ

地蔵町　佐古徳子

佳作　どうしてるこの曲聴くと友の顔

大藪町　古川和子

佳作　なぜ出来ぬひと月前は出来たのに

甘呂町　日和田喜美子

佳作　桜咲くお尻ほんのり春ふたり

須越町　梅本愛子

佳作　まだまだと夢が両手をはみ出して

犬上郡豊郷町　須田さゆり

佳作　世の中を変えるつもりが世話になる

須越町　疋田浩二

佳作　咲く時を知ってる花はゆったりと

西沼波町　外海芳子

佳作　散りゆきてなお美しき花いかだ

馬場二丁目　木村美智子

佳作　ボタン穴をそのままに着る亡母のセーター
犬上郡甲良町　川口利江

佳作　三途の川ナンバーカード要りますか
大藪町　大塚しのぶ

佳作　いい夢を見させてくれた布団干す
鳥居本町　寺村美惠

佳作　八分咲き保ったままで弾んでる
須越町　疋田弥栄子

佳作　満月がまるくなれない紛争地
大藪町　小南苑子

佳作　コロコロと老いるなにやら引っさげて
犬上郡多賀町　清水容子

佳作　老いの春一度は捨てた夢を呼ぶ
宇尾町　金森光男

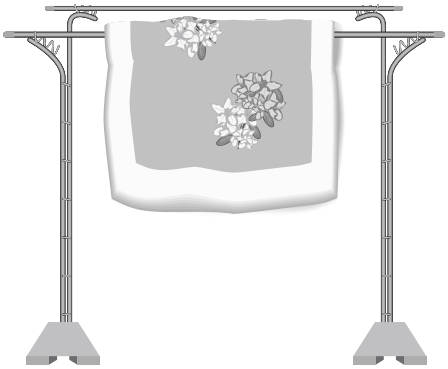
佳作　あたりまえか普通に水が出る暮らし
東沼波町　木原正

佳作　薬ぬる傘寿の重き夫の背
京町一丁目　川辺由子

佳作　ポストです孤独ですけど存在感
東近江市　村上定

佳作　高齢者聞こえなくても通じてる
日夏町　真木玉子

佳作　ふらここに米寿の身なるを忘れけり
米原市　西尾辰之



《総評》

彦根市民文芸に川柳部門が設けられたのは昭和五十（一九七五）年度です。これまでの選者の皆様のご努力は勿論のこと、彦根市の担当部門の皆様のお陰だと思います。これからも、川柳部門が充実した内容で続いて行くことを切に願っています。

私がこの総評を初めて書いたのは平成三（一九九一）年度で、それ以来、今回が三十四回目になりました。この部門に少しでも役に立ったのであれば無上の光栄です。これからも生ある限りこの部門の振興に努めてまいります。

応募作品の中で、内容がありふれていて平凡なものは入賞率が低くなります。難しいことですが、絶えず新しい着眼点で対象を見詰めて、作品に仕上げてください。創作の苦しさは、作品が出来上がると喜びに代わってゆきます。これからも、頑張って応募してください。

入賞作品は、作者の創作の努力がもたらしたものです。いつの日か、これらの方々の中から、指導者が現れてくることを大いに期待しています。

青木　十九郎

今回の応募者数は五十六名で一六五句の中から二十九句を選びました。彦根市内と近郊の市町の川柳愛好家の皆様と句を通じて交流できたことを喜んでいます。

喜んではいるのですが、今年は特段新たな物語を見せていただける句は少なかったように思います。

今年のＮＨＫの大河ドラマが「光る君へ」で紫式部の物語、また二月からのドラマでは三浦しをん著の「舟を編む」、辞書造りの話でした。「言葉」の面白さや奥深さを噛みしめながら楽しく観させてもらいながら、多くを学んでいます。

枕草子の「をかし」の世界から現代の「やばい」まで言葉は変遷しています。また、カタカナ語の氾濫や差別語に類する言葉の使いにくさもあります。

今の言葉で今を句にする、というのは案外難しいものです。言葉という変化する道具をどう使いこなすか。みんなで挑戦しましょう。

重森　恒雄

自身が川柳を書き始めた頃のことを思い起こすと、現状に不満があるわけではないのに「ここと違うどこか」や「言葉にしたいのにどう言えばいいのか分からないこと」への希求を抱えていたように思います。

そして、そんな者がなぜ絵画教室やコーラスやパッチワークではなくて、川柳に向かったのか。それは今も答えが見つからないのですが、私が伸ばした腕を川柳がグイッと引っぱってくれたのだと感じています。至らぬ私を「それでもいいのだよ」と言ってもらえた実感があったのかもしれません。

彦根市民文芸の川柳は他者に向ける目の優しさや社会人としての良識を感じさせる句が多いです。しかしそれは、ややもすると標語

やスローガンになってしまいがちです。
美しくまとまった句を書く必要はありません。完璧ではない自分を見つめ、自分を取り巻くものに目を凝らして作品を書いていただきたいと思っています。
作品を寄せてくださったすべての方に感謝を込めて。

峯　裕見子

◇◇◇